

from 1996 to 2016

[戦士たちの証言]

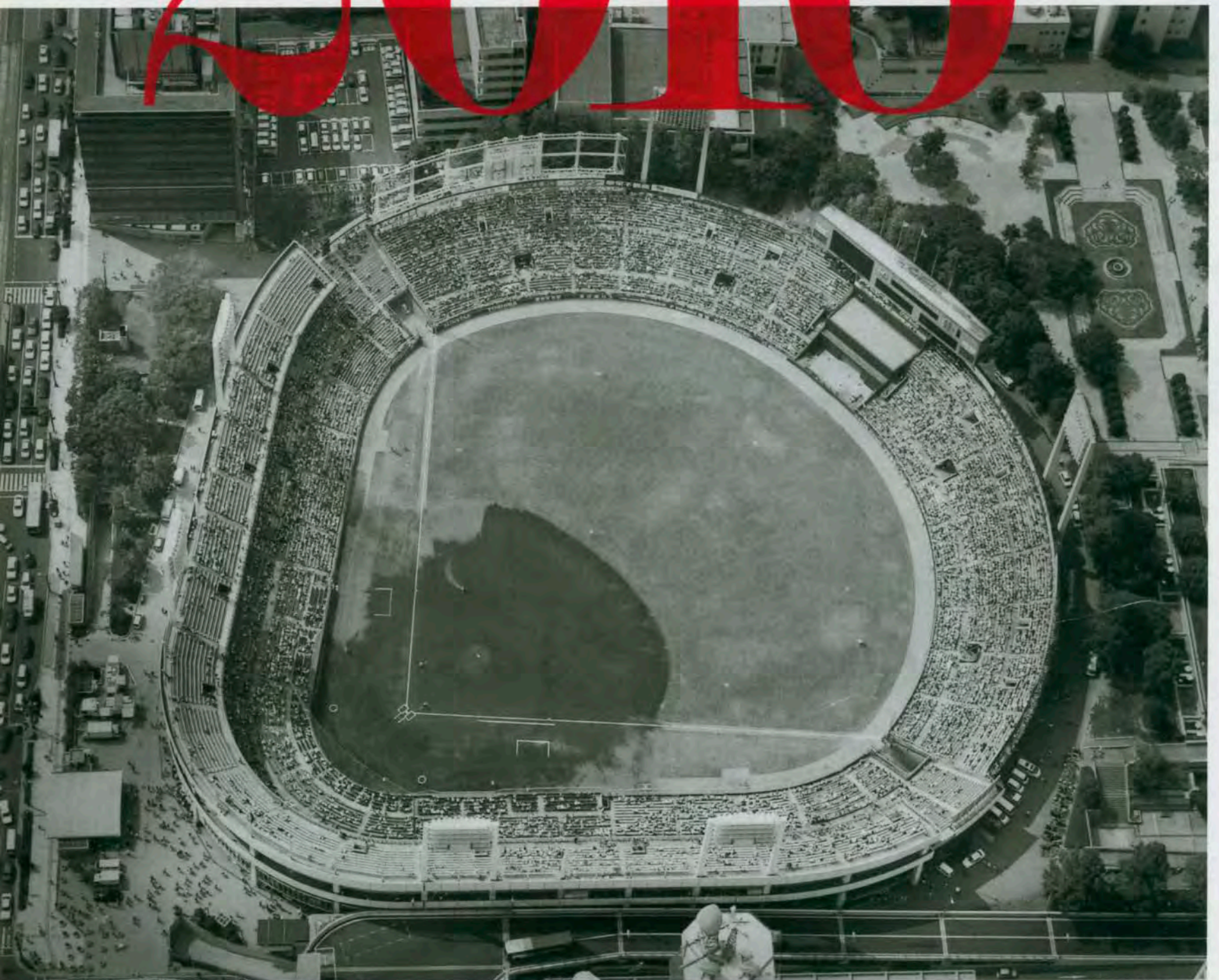
メークドラマ "悲劇"をこえて。

就任2年目にして東京ドームの宙を舞った
緒方監督は、20年前の"悲劇"を経験した1人。
あのとき赤き軍団になにが起きていたのか——
選手達が明かす真相、今に受け継がれる想いとは。



鈴木忠平=文
text by Tadahira Suzuki

前康輔=写真
photograph by Kosuke Mae



札

幌・円山球場は雨だった。1996年7月9日、首位を走る広島は最大のライバルと目される巨人との対決を迎えた。両軍には11ゲームもの差があった。しかも、先発の紀藤真琴は、5月1日から2カ月半の間、負け知らずの7連勝を飾っていた。すでにチーム内外で「優勝」の2文字が語られ始めていた。

ただ、そんな盛り上がりの中で、紀藤はある異変を感じていた。

「夏場に入ってからかな。体が言うことを聞かなくなってきた。選手の層が厚い巨人が下（の順位）にいるのは嫌らしかったし、追われる重圧は感じていたけど、それよりも疲れで体が動かなくなっていた」

試合が始まった。2回、2死から下位打線の連打で1点を失った。次打者は投手の斎藤雅樹。ここで攻撃を切るはずだった。ところが、右前打を許してしまうと、ここから歴史的な連打を浴びた。打ち取った当たりがことごとく野手の間に落ちた。3番松井秀喜の打球は一塁正面だったが、雨の影響なのか、イレギュラーにより、大きく跳ねてライト前に抜けていった。今もセ・リーグ記録として残る9者連続安打で7点を奪われた。そのうち8安打を浴びてマウンドを降りた紀藤の胸には、ある予感がよぎっていた。

「まだ、ゲーム差もあつたし、危機感というほどではないんだけど、少し嫌な感じがした。松井（秀喜）の打球が一塁の前で大きく跳ねたり、詰まった打球が落ちたり、これは巨人に何かがついているのかな、と……」

チームもただの1敗と受け止めていた。これが後にターニングポイントと語られる試合になろうとは、この時はまだ、誰も知るよしもなかった。

紀藤が抱いた小さな予感には不安に変わり、危機感へと膨らんでいった。もともと、爆弾を抱えていた肩と腰が限界を迎えた。9月の甲子園での阪神戦、普段は1錠しか飲まない痛み止めを3錠飲んで、何とか先発のマウンドに立った。だが、イニング間でベンチに戻ると、座っていることすら耐え難かった。仕方なく、味方の攻撃中はベンチの奥で横たわっていた。

（広島）攻撃が終わったら、教えてくれ

NIKKAN SPORTS



Makoto Kito

紀藤真琴

そうスタッフに告げた。登板中に横たわるエース……。その悲壮な姿がチームの状況を表していた。紀藤がプロの投手として転機を迎えたのは入団から11年目の'94年だった。阪神から投手コーチとしてやってきた山本和行に出会った。

「俺は阪神の頃からお前を見ていて、こうしたら、良くなるんじゃないかと思ってる部分がある。どうだ、やってみるか？」

命令でも、押しつけでもない。一人のプロとして扱ってくれたことがうれしかった。

「やってみます！」

山本が教えてくれたのは、ひたすらメカニカルだった。人間の体は毎日、状態が違う。だから、投手が正しいフォームで投げるためには日々、修正を施さなければならぬ。その年、紀藤は16勝を挙げた。シーズ

ン中、毎日、鏡となってくれたのが山本だった。左足を上げてから、リリースまで。自分でも気づかない部分のズレを指摘してくれた。翌年も10勝を挙げた。2年連続2桁勝利で'96年にはエースとなっていた。ただ、この年が、それまでと違っていたのは山本が退団していたことだった。

「腰が痛いから、背中を反ることができない。すると、体が早く開いてしまう。まっすぐはシュート回転するし、変化球も早く曲がってしまう。わかってはいるんだけど、自分では修正できなかった……」

持ち味の外角への制球がままならない。優勝争いの中で、思うようにならないフォームを修正しようにも、自分を正しく映してくれる鏡がなかった。

また、紀藤には初めて2桁勝利を挙げた年から、ずっと続けていた儀式があった。登板当日、早朝に起きて散歩に出かける。そして、その日、対戦する相手の1番から9番打者までをイメージして、シャドーピッチングをする。遠征先ではホテル近くの目立たない場所で行った。通勤途中の人に奇異の目で見られることもあったが、何があっても欠かさなかった。しかし、そんな心の拠り所になっていた儀式さえ、この年の夏場にはできなくなっていた。

8月以降、紀藤は勝てなくなった。9月には5試合連続KOを食らった。それでもマウンドに立ち続けた。

「プロだから相手に負けるのは仕方ない。でも、自分だけに負けてはいけない。カーブにはそういう伝統があるでしょ。衣笠さんが骨折してもフルスイングして、津田さんが病気を抱えながら、『頭が痛い』と言いながら投げたのを知っている。『無理です』なんて、言えなかった」

そして、代わりにエースを務める投手は、この時の広島にはいなかった。

野

村謙二郎はあのシーズンを振り返る時、悔しさと痛みを同時に思い出す。7月6日、神宮でのヤクルト戦で盗塁した。二塁へ滑り込んだ際、左足に激痛が走った。立ち上がれず、そのまま担架に乗せられて、退場した。

「足が……、足首が逆向いてるぞ！」

スタッフの叫びが聞こえた。球場から病院へと運ばれる救急車の中で野村は思った。

「骨が折れていて、ギブス固定しないといけないようなら、終わりだな……」

この年、広島打線は「ビッグレッドマシン」と異名を取った。緒方孝市、正田耕三、野村、江藤智、前田智徳、ロベス、金本知憲と、俊足好打に長打力まで兼ね備えた選手がズラッと並んでいた。中でも、中心が野村だった。91年のリーグ優勝を経験した男は3番遊撃手として、精神的支柱でもあった。首位を走る夏場に、離脱するわけにはいかない。その一心だった。

レントゲン撮った後、医師に別室へと呼ばれた。この時、野村は心の底で叫んでいたという。

「先生、頼むから、骨折と言わないでくれ！ と。それだけでした」

剥離骨折だった。普通ならプレーはできない。ただ、野村はそれを聞いて、胸をなでおろした。球団には「捻挫」と発表してもらった。3試合を欠場しただけで、戦列に復帰した。痛み止めの打ち、テーピングをぐるぐる巻きにして、グラウンドに立ち続けた。

それでも、相手の「傷」を見つければ、そこを徹底的に攻めるのがプロの世界だ。手負いの野村は徐々に成績を落としていった。それに伴って、チームも急降下していった。広沢克己や、落合博満が離脱しても、勢いを増していった巨人とは圧倒的に球団としての「体力」が違った。

巨人の猛追を受け、次第に動きが硬くなっていく仲間たちに向け、チームリーダー野村は何度も決起集会を開いて訴え続けた。

「重圧の中でやるしかないんだ。今日は今日、明日は明日。切り替えてやっていくしかないんだ！」

野村のあがきも、叫びも届かなかった。8月の終わりに4番江藤が離脱した。ボロボロになった広島は力尽きた。

「いつも東京に、巨人に負けたくないと思ってやってきた。『なんで巨人はあんなに恵まれているんだ』と僕らが言ってしまうば、それで負け。だから、そうい

1996年のスターティングメンバー

	率	本	点
右 緒方孝市	.279	23	71
二 正田耕三	.235	2	35
遊 野村謙二郎	.292	12	68
三 江藤智	.314	32	79
中 前田智徳	.313	19	65
一 ロベス	.312	25	109
左 金本知憲	.300	27	72
捕 西山秀二	.314	3	41

from 1996
to 2016

Shinji Sasaoka 佐々岡真司



野村謙二郎



Kenjiro Nomura

うことは絶対に口にしなかった。逆に、巨人の選手に『広島は恵まれていないのに、なぜ、あんなに……』と言わせたかった。だから、あの年は僕の人生で一番悔しい。本当に、記憶から消してしまいたいくらい。今、眉間にしわを寄せて、そう吐き出す言葉には、つい昨日の出来事を語っているような、生々しい感情がこもっていた。

佐

々岡真司はあの年、初めてシーズン通して、ストッパーを務めた。7年目、怖いものなどなかった。巨人に最大11・5ゲーム差をつけた7月、チーム内にはオフの優勝旅行の話題がはじめていた。佐々岡も、秋にはそうなるものと信じて疑わなかったという。

「まだ、抑えの怖さも知らない若造だった。だから、優勝旅行はラスベガスと聞いて『ラスベガスかあ。どんなことしようかな』なんて考えていた」

だが、そこから地獄が待っていた。オールスター明け、チーム内に風邪が蔓延した。佐々岡もその1人だった。後半スタートに登板することはできず、いきなり4連敗を喫した。ひたひたと迫ってくる巨人の影。そこから1試合ごとに、佐々岡が上がるマウンドは重さを増していった。

「先輩投手の勝ちを消してはいけないというのもそうですし、首位にいてことで、逃げ切らないといけないという重圧がどんどん強くなっていった」

佐々岡は入団2年目、先発投手として17勝を挙げる大活躍で優勝を経験していた。7・5ゲーム差をつけられていた中日を逆転した。先輩や、首位チームの背中を追いかけるだけでよかった。勢いで最後まで突っ走った。そんな佐々岡が初めて追われる者の立場を知ったのだ。

夏場になると、ベッドに入っても、体の緊張が解けない。明日もまた、あの重苦しいマウンドに上がるかもしれない……。そう考えると、眠れなくなった。それまで恐れ知らずで快速球を投げ込んでいた若き守護神を、恐怖が蝕んでいった。

8月のある日、全身にじんましんが出た。妻に電話

して、遠征先の横浜まで薬を届けてもらった。医師に見せても、はっきりしたことはわからなかった。ただ、心身の疲労が原因だろうと指摘された。

心から侵蝕してきた重圧は、次第に体にまで及んだ。ある試合、投球の合間に滑り止め用のロジンバッグを取ろうとして、ハツとした。手が届かない。腰を折ることができないのだ。シヨックだったが、佐々岡は、その異変を誰にも気づかれないように注意しながら、そつと膝を折って、何とかロジンを拾った。

その頃、試合前のトレーナー室は主力選手でごった返していた。痛み止めを打つ者、点滴を受ける者、テーピングを施す者……。とても、自分のことなど言い出せなかった。まして、カープのストッパーという地位に、人一倍誇りを持っていた佐々岡にとって、その座を失うかもしれない怖れの方が勝った。

「みんな少々の痛みでも、それを出さずにやっていた。痛いというのが恥ずかしかった。それに抑えは自分しかないという気持ちも強かったですから」

佐々岡が生まれ育った島根県では、巨人戦の中継しかやっていなかった。周りはみんなジャイアンツファンだった。だが、佐々岡は、なぜかたまにしか目にするのではない赤いユニホームの虜になった。特に津田恒実が好きだった。ストリートで真っ向勝負する。炎のストッパーに憧れた。投げ方や草まで真似した。社会人・NTT中国では複数球団に狙われる逸材だったが、自ら広島を熱望し、ドラフト1位で入った。津田と同じユニホームでプレーできることが嬉しかった。1年目、佐々岡は先発としてプロ初勝利を挙げるなど、順調に滑りだした。ところが4月、津田が故障で離脱すると、監督の山本浩二に呼ばれた。

「お前にストッパーをやってもらおう」
心が高鳴った。憧れていた津田の後を自分が継ぐ。暫定措置ではあったが、カープの守護神が持つ重みを胸に刻んだ。そして、津田は翌年、悪性の脳腫瘍が見つかり、闘病の末に32歳の若さでこの世を去った。佐々岡という投手を象徴する記録がある。先発での100勝と、100セーブ。日本プロ野球史上ただ2人しか成し遂げていない偉業だが、名球会の栄誉は与え

Koichi Ogata 緒方孝市



左から、正田耕三、野村謙二郎、三村敏之監督(当時)、江藤智、高信二



SPORTS NIPPON

NIKKAN SPORTS

られていない。91年に17勝を挙げ、沢村賞などタイトルを総なめにした。先発投手としての能力は誰もが認めていた。だが、チーム事情で抑えと先発を行ったり来たりした。働き場所を固定すれば、200勝も夢ではなかったのではないか。そう、言われたこともあった。プロ野球という個の世界で、チームに振り回された不運に同情も寄せられた。ただ、そんな声に対し、佐々岡はずっと持ち続けている純粋な思いを明かした。

「僕はもともとカープが好きで、入団した人間です。母親にカープが勝つところを見せたいという気持ちが強かった。チームの勝利に勝るものなんて、ないんですよ。津田さんの姿を見て、勝利の瞬間、仲間とハイタッチできる喜びを知った。ストッパーほど、やりがいのあるポジションはありません」

女手一つで育ててくれた母は当初、プロ入りに反対していた。そんな母を安心させるのが広島島の勝利だった。そして、何より佐々岡とすれ違うように、壮絶に散っていった津田の魂に報いたかった。赤いユニホームのためなら、先発でも、抑えでも、いつも同じ気持ちで腕を振れた。だから、佐々岡はあの年、眠れない夜を過ごしながらも、最後までチームの命運を背負う最終回のマウンドに立ち続けた。

10月6日、巨人が優勝を果たした時、広島選手たちは横浜で試合を終えたところだった。佐々岡は、その瞬間をテレビで見ている。歓喜のマウンドにいたのはカープが指名し、カープが育てた左腕・川口和久だった。3年前に導入された「FA制度」が市民球団に突きつけた残酷な現実。それをじっと、目に焼き付けていた。

「胸上げを見ながら、本当に悔しかったのを覚えています。絶対に次は俺たちが逆の立場になってやるぞ、と思った。でも、結局、僕が引退するまで、その時はやってこなかった。あの時、勝っていれば、こんなに長く優勝から遠ざかることもなかったのかな、と。そういう責任も感じますね」

今、二軍投手コーチを務める佐々岡は、そう言って、遠い目ををした。

今

より球団格差がはつきりしていた時代、持つ者が起こした「奇跡」の裏で、持たざる者が泣いた。紀藤も、野村も、佐々岡も、その「悲劇」の主人公となった。ただ、男たちに共通することがある。それは悔しさを口にしながらも、悔いが見あたらないことだ。あの時、もっとこうしていれば……。そういう未練がないのだ。彼らは間違いや、ミスを犯したわけではない。矢がつき、刀が折れるまで戦った末、戦場に倒れたのだ。紀藤の言葉がそれを物語る。

「ファンの方には申し訳なかったと、今でも思う。でも、みんな、今できることをやった。あれ以上のことはできなかった。それぐらい、限界まで戦った。だから、悔いはないんだよね」

あの年を境に、広島は長い、長い、トンネルに入った。15年連続Bクラスという屈辱が続いた。そんな中、あの年、チームリーダーだった野村は暗闇の時代を終わらせるべく、2010年に監督となり、菊池涼介、丸佳浩という将来のリーダーになれる逸材を抜擢した。「優勝を逃した後、長く低迷しましたよね。それはチームリーダーがいなかったからなんです。(07年に)黒田と新井が移籍して、そういう存在がいなくなりました。だから、自分が監督になった時、まず、リーダーを作ろうと思いました。菊池は1つ教えたことを、すぐに吸収できる能力があった。丸は誰にもない勝負強さがあった」

野村は、かつての自分よりも、もっと強く、幹の太い柱をつくりたかった。優勝するためには、そういう男が必要だということを知っていた。だから、菊池と丸にはあえて、こう告げた。

「俺はお前たちが不甲斐なければ、みんなの前で怒るぞ。期待するから怒るんだ。だから、それに負けるな」

今年9月10日、緒方は東京ドームにいた。あの'96年、1番打者としてリーグ最多50盗塁を記録し、打線を引っ張り続けた男は、巨人を相手に25年ぶりの扉をこじ開けた。真っ赤に染まった敵地で宙に舞った。悲劇を知る指揮官は、それを経験したものにしかわからない

2016年優勝時のスターティングメンバー

	率	本	点
遊 田中広輔	.272	13	36
二 菊池涼介	.323	13	54
中 丸佳浩	.295	19	86
一 新井貴浩	.304	18	98
右 鈴木誠也	.336	26	88
左 松山竜平	.291	10	38
三 安部友裕	.291	6	31
捕 石原慶幸	.204	0	13

from 1996
to 2016



Hideki Sugiyama

胸の内を明かした。

「強い、強いと言われましたが、開幕からずっと苦しかった。正直、最後の1アウトを取るまで、信じられなかったです……」

そして、深く息を吸い込むと、あの時、ともに戦った仲間や、儚い夢を見たファンの思いも込めて、スタンドに向かって、こう叫んだ。

「全国のカープファンの皆さん、お待たせしました！」

あの年、守備固めや代打でチームを支えた高信二はヘッドコーチとして、それを見ていた。時折、目頭を押さえながら、巨人の本拠地が赤く揺れる様を見つめていた。

今シーズン、緒方と高は話し合った上でメディアカルスタッフに告げたという。

「選手に怪我の予兆があれば、早めにどんどん言うように。遠慮してはいけない」

そして、選手に対しては試合のない月曜日を「休養日」とした。かつての猛練習のイメージからはかけ離れて映るが、高はスタッフからのある報告を聞いて、手応えを感じたという。

「もちろん、体を休めるための休養日ですから、休んでいいんです。ただ、スタッフが『ほとんどの選手が球場に来て、体を動かしていますよ』と教えてくれた。これは、いけるんじゃないかと思いました」

今年7月下旬、2位巨人に11ゲーム差をつけた。あの年と酷似する状況に周囲は囁し立て、広島市民は不安を抱いた。

メークドラマの再現か――。

だが、広島は、あの時のように力尽きることはなかった。4番の新井貴浩を休ませた時には、普段はベンチに控えている松山竜平が打った。ベテラン黒田博樹が勝てない時は、若き野村祐輔が勝った。伝統を継ぎながらも、革新の一步を踏み出した新時代の広島カープは勝者にふさわしかった。そして、その礎を築いたのは、あの年の悲劇を知る者たちだった。

20年前、力尽きて倒れた「赤き屍」の上に、今、歓喜の花が咲いた。